

十二月號



特 輯

女子青年の新出發
疎開作家は語る

文化廣場

昭和二十一年十二月二十日印刷納本 昭和二十一年十二月廿五日發行
昭和二十一年六月二十一日第三種郵便物認可

第一卷・第五號

昭和二十一年十二月二十日印刷納本 昭和二十一年十二月廿五日發行
昭和二十一年六月二十一日第三種郵便物認可

臨時定價四圓五十錢



南 廣 島 通 リ
カトリック教會内

聖ヨゼフ醫院

責任醫師 西村春雄

營 業 御 案 内

自動車エンジン及各部修理
發動機、板金各部改造
オートバイ各車輛
一切火造り



宮崎市淀川町二丁目四〇
平原自動車修理工場

營業者 平原 木一

家庭生活の科學化は

先づ優秀な家庭藥の選擇を
先決とする

その要望に應へる豊富な藥
品がすぐあなたの近くにつ
くられてゐる

各種製藥販賣

速効散 追膏藥 宮崎胃腸藥
婦人湯 小兒セキチール
宮崎救命丸 牛馬藥 岡本鎮咳劑
保生丸 疝氣散 ちしん膏
其ノ他卓効藥各種

宮崎縣製藥株式會社

宮崎郡田野村中原

特輯 女子青年の新出發



渾沌を救ふもの

山高しげり

この間信州の農村の婦人會に招かれて出がけ
て行つて、女子青年團の素人演藝なるものを見
る機會を與へられて、おさうした。各分團の出
し物が股旅物の連發であり、車怯極まる流行歌
と舞踊の連發なのである。娘たちはすこぶる陶
然と、白粉を塗り紅をつけ、忠治になつたり、
武夫になつて出てくる。觀衆である親たち——
婦人會員も、弟や妹——國民學校の兒童もすつ
かりその雰圍氣に溶け込んでゐるやうだつた。
私は餘り驚いたもので、校長や婦人會の幹部と
話してあつてみたが、人人の話ではこれは全部落
的といふより全縣的の現象であらうといふこと
であつた。若い人人が娛樂を求めのは當然だ
し、殊に戦争といふ抑壓を除かれたのだから、
餓えるやうに求めてゐる心持も判るけれど、そ
れにしても餘り内容がひきすぎるではないかと
いふと、全く同感だがいまでは男女青年團とも
民主主義で下からもり上つた組織だから、校長

なご何等關係がない、しかもまだどこからも指
導の手は伸びてゐないから、結局自分たちで近
い處にこれを求めるとなればまづは旅藝人位が
指導者といふことになるのだといふ。そしてこ
れが中中金のかゝる娛樂で、一公演千圓、千五
百圓に上るけれども、又一度公演となれば親た
ちがおはなを包んでくれるから、さうかすると
經費一切を支拂つても尙千圓も純益をのこす例
もある、とにかく男女青年團はこの冬の農閑期
を毎日、夜このために費したといつても過言で
はあるまいが、いはばもう峠は越したと見るべ
きで吾々飽かれ氣味でもあるし、男子の間には
内容の検討が必要だといふ聲も上つて來てゐる
が、女の方はさうしてさうして溺れ切つてゐる
やう、といふことであつた。
あいにく女子青年團のひとつと話しあふ機
會がなかつたので、その人人の言分を聞くこと
が出来なかつたけれど、これも書讀會なご時間

死者は怒る

田中克己

息子の戦死の公報のあつた翌朝
五助さんが榮造さんにたづねてゐる
「蜥蜴や蛇を食うたあと
食ひ物がなくなつて飢ゑ死をしたさうな
佛前に食ひ物を一杯そなへてやらうと思ふが
怒りはせんぢやろか
生きてゐるうちに食はせずといてと」
榮造さんは困つて返答しない
ぬすみ聞きしてゐた私も困つてしまつた
死んだあとで人間は怒るだらうか

文化廣場

十二月號

特

輯

渾沌を救ふもの

革命者の誇りに生きよ
自主性の確立

山高しげり
伊福部敬子
長池澄子

陳開作家は語る

誌上座談會

伊藤永之介
小田嶽夫
上田秀信

山村成吉
森成吉

甘藷談義

植村敏夫

お灸談義

田村忠雄

死者は怒るか

田中克己

日田にて

東中潤

江南想望

小田黒潮

ふるさこの庭

岩瀬迪夫

D・H・ロレンス私解手帖

谷村博武

チャタレイ夫人の戀人

一少女

下村千秋

新樹の心

渡邊和郎

讀者文藝

表紙 鹽月桃甫 後記

はいくらもあつたのだが、彼女等はさういふ席
にくる氣がなかつた様子である。

その後各地方について聞いてみると、やはり
これは全國的の現象らしい。つい此の間文部省
に婦人組織についての協議會があり、その席で
この事實を披露に及んでみたら、同じ様な材
料をもち合せてゐる人も少しはゐるが、肝腎の
文部當局は全然存じはなかつた。自主的な青
年團體、青年民主主義會議とは共產青年同盟と
いふ方面では多少取り上げはじめてゐるやうだ
し、共產黨はいち早く總選舉後の農村に對する
運動として演劇指導等の文化運動に乗り出して
ゐるが、私はここに女子青年の問題の一つとし
て示すに留める。

これで想い出すのは例の進駐軍兵士と愛情の
散歩に忙しい娘たちのことである。八月十五日
私二重橋前の廣場をみたした大衆の中で、若い
女性の顔が壓倒的であつたことを忘れることは
出来ない。ふだん職場などではもう少しハキハ
キしてほしいと思はずにはゐられない彼女たちが
その日は若い男子を押しつけるやうにして最前
列に進み、玉砂利の上に端坐瞑目、滄茫たる涙
がその玉砂利を濡らしてゐた。それなのにそれ
から一ヶ月たつた、ぬのに、日比谷公園をア
メリカ兵と手を組んで歩く女の子が出て來た譯
でしかもこの現象も敢て東京には限らず、ほと
んど全國的といふを憚らないのである。
最近ではマ司令部から愛情の散歩は「發度と
いふことに指令が出たけれど、さういふものか

滅びたには滅びたが一掃されてはゐない。世界を歩いてゐるひとたちに聞くと、あゝいふ女性はこの戦敗國にもゐるもので、いはば臭いものにたかる蠅にひとしいのだいふが、われわれとしてはあさうかと思ひすることも出来得ない。

つい先頃、ある工場の子供従業員と話しあつた時、右の二つの事例を示してその感想を求めてみたが、結局彼女等は生きる方向がつかめないのだと、傍聴側の男子工員の間から回答が出た。その工場は正に従業員組合が出来てゐても労働協派らしかつたが、男子側の中しつかりした態度に比べれば、女子側はまだまぼうつとしてゐて、さうかすると、演藝に夢中になりかねない顔つきの混つてゐた。労働組合運動は今日すばらしい勢ひで、日本民主化の一翼を承つてはゐるものの、たかひとつた自由でないだけに、婦人解放はまだま身についてゐる。この方面の女子指導者も亦昔のそれと似たるみを相當なめづら道を拓いて行くのではあるまいかと思はれるが、それにしてもこの方はいはば軌道にはのつた形である。

それにひきかへて農村の娘たちには、女子青年團といふ組織はあるにはあるけれど、そしてそれ今日一應自主的な形はとつてゐるけれど、指導者らしい指導者もなしで、てんでに穿きちがへた自由主義の方向へ迷々として流れてゐなければ幸ひである。共産黨も社會黨も青年部や婦人部は全てこれからである。公式論は決つて

ゐても、その骨にさう肉をつけて實際指導をみるかは全く未知数の感がある。かつて農民組合運動がある程度展開された時にも、婦人部は全く取のこされてゐるが、その婦人の問題が解決されなければ封建性が農村から拂拭はされないのだつた。問題は昔のままでこのされてゐる形である。

文部省がむづむづしてゐる様子だが、これはやはり遠慮して貰ふべきだと思ふ。そこで、私は地方に生れつつある文化團體こそ、かういふ問題ともつとと取組むべき責任があると思ふ。

て、娘たちを民主化する具體的な方法を豊富にもつた若い女性でなければならぬと思はずにはゐられない。芝居も結構、歌もよろしい、明るく楽しい生活の中に、新日本が建設出来るやうに、吐きちがへた自由主義や民主主義をふりまはし、いたづらなる新舊思想の衝突をまき越さないやうに、愛情のかい問題を切り揃へるひとびとが、この仕事に挺身するやうにならなければならぬと思ふ。

それにしても日頃の娘たちは、もう正しく立ち上つてゐるのだらうか。それとも玉碎を覺悟したあの日の氣持から百八十度の轉換が容易に出来ないで、うつろな心持を抱いてゐるのだらうか。青年の求める聲の大きさに對して、己れの無力さを訴へるやうな娘も都會にはゐるけれど田舎は一體さうなのであらう。禁酒青年でなければ結婚しないなどと聲明したやうな往年の農村女子青年の意氣が、民主國家日本の再建にはぜひ必要なだけれども――。

革命者の誇りに生きよ

伊福部 敬子

青年とは、革命者の名である、と私は思ふ。これは、女子の場合も同様である。革命といふ

ことは過激でありすぎるといふなら、革新といつてもいい。

青年は、男も女も、革命者であるといふ意識を、まづもたれたいと思ふ。

ところが、戦争中、實はそれよりずっと前から、何かのために引ずられて動いて來てゐたので、その權力がなくなつた今日は、目標を見失つて、誰も方向にまよつてゐる。中でも、青年男女の苦悶こそ最もふかいやうに思はれる。

あちこちで聞くことは、青年男女が、破目を外して日夜馬鹿馬鹿しいさわざをしてゐるとか、青年層の殆どが不良化してゐるとかいふ話で、多くの人が、終戦後の虚脱状態といひ道義が地に墮ちてしまつたと嘆息する。私は一方に若い女性の苦悶のすがたを見、一方に古い道義が地を拂つたと嘆く聲をきき、そして思ふのは、日本に、本當の意味での道義とか道徳とかいふものがあつたらうか？といふことである。この戦争のために無道徳――不道徳ではない――になつたのだらうか？敗戦によつて、これまでは確かにもつてゐた秩序や道義が顛倒したのだらうか？

私の友人で、長らく外國で暮して來た人が、こんなことを話した。自分はアメリカにゐた間アメリカの少女たちと親しくしてゐたので、よく家庭にも遊びに來た。或日、女學生があそびに來たので、家族と一緒に茶をのまうといつて卓子についたが、その少女はコーヒーをのまないといふ。なぜ飲まないのかと訊くと、『學校の先生が、コーヒーをのむと頭腦がわるくなる』といふから、飲まないことにしてゐる』

と答へるので、教師の禁令で、のみたいコーヒーも我慢してゐるのだらうと氣の毒に思ひ、『でも、ここには先生はゐないよ』といつたが、そのことばの意味が解せぬ風で怪訝な顔をしてゐる。

『ここには叱る先生がゐないから、一杯ぐらゐいいでせう、今日のは特別おいしいよ』といつたところ、少女は頭をふつて、『自分のために飲まないのです。自分の頭腦を健康に保つのは私の自由です』といつたのでおどろいた。

自由といふと、規則に従はない自由、習慣や社會の約束を勝手にやぶる自由、そればかりを考へてゐて、正しいことをいふ自由や、正しいことに誘はれない自由のあるといふことをつい忘れてゐたのだから、と。

この話をきいた私も、おどろいて、自分たちの社會をみた。

鞭をもつたものが、居ても、居なくても、正しいことに就き、正しくないことは斥ける、それを他人の命令や權力でやらされるのでなく、自分の意志でやる、道徳といふものは、このやうに自主的なものでなければならぬのだけれども、日本には、このやうな道義が、戦争前にもあつたであらうか？

道義國日本と、自ら言ふぐらゐるだから、戦前まるで日本に道義がなかつたわけではないが、それが個人に根をおいたものでなかつた、自分の自由意志で動くのでなく、他から強いられて

辛うじて不正に誘はれないといふ、他主的な、服従道徳であり奴隷道徳でしかなかつた、と私は思ふ。

では、これまでの日本で、繩尻をとつてゐたものは誰であつたらうか、それは社會も、學校も家庭も、その役をしてゐるが、道徳の中心をなすものは『家』であつた。家の制度から、すべての道義も秩序も割出されてゐたのである。

家庭は家と必ずしも同じではないが、日本ではまづ似たものであるから、家族の間では相扶相信、實に美しい愛情で結ばれるけれども、家庭をはなれた社會に對しては何の信義も愛情もたない。家の名の出るところでは慎しむけれども、名も知らず生れも知らぬ旅の上では、恥はかき捨てて、破廉恥のかぎりをつくしても恬としてゐる。誰の家にも屬しない公共のもの、共有の場所、共同の施設などは、そんなに汚損しても、ここに咎めるところがない。もつと著しい例は、貞操観がたかいたいはれてゐる日本の婦人が、家の必要のために命令されれば、身を賣り貞操を賣つて、恥づるところか、親孝行をしてゐると、誇りにし、社會でもそのやうに認めてゐる。

結局、女に限らず、日本人のすべてが、自身、道徳をもたなかつた、個人本位の、自由な自主道徳をもたなかつた。一人一人は、すべて『家』といふ團體の一部であつて、個人として獨立してゐるなかつたのだと省みさせられる。自由な自分の意志で、行動するのでないからいつも何かに引ずられ、命令され、動かされる

ければ動けない。繩をゆるめられれば道草をくひ、目がなければ不正をしようとし、鞭がなければ規則をやぶらうとする、そしてそれを、自由だと考へたり、言つたりしてゐたのではない。長い間、『家』といふものにおさへられ、しばられ、引ずられて、めいめい個人の自由な責任でものを考へたり動いたりすることがなかつたから。

婦人の場合は、これが最も甚しいやうに思はれる。そこで、私どもは『家』といふものについて、考へなほす必要がある。戦争中、國の必要のために家庭から引出されて工場に挺身勤務した女子青年たちは、終戦と同時に、一まづ家庭にかへれ、といはれた。突差の場合とはいへ、一身の保護と將來の生活とを、家族制度に依存させようとした、古い考へ方である。かつては、日本の婦人は、娘は、『家』や『家庭』にさへついてゐれば、無條件に養つてもらへた、それほ『家』といふものが鞏固であつたから。けれども、何度かの大きな社會的變動をうけて、殊に今度の戦争の大きな激動によつて、いまは『家』そのものが弱くなり不安定となり、家長である父を失ひ兄が失業し弟が戦死して、家族を養へないやうな状態になつてゐるものが澤山ある。以前は、社會の生活の單位が『家』であつただけれども、現在は個人ひとりひとりが、生活の單位として立たなければならぬやうになつたのである。

『終戦後あちこちの町村にできた男女青年團が何をしてゐるのかと思へば演藝會ばかりやつてゐる』
といふ世間の聲が私の耳に入つたのは二月の末あたりから三月にかけてのことであつたらうか。それが宮崎縣に就て言はれるのではなく、これは既に全國内に蔓延してゐると言はれて居た。この聲に私が内心慥たるを得なかつたのは、私自身の青年團員の一人であり、そして私の部落の分團をして演藝會をやらせた首謀者であつたからである。



自主性の確立

——團員の實踐手帳から——

長 池 澄 子

もともと私はこの村の者ではなく二年程前からしか住んでは居らず、毎日汽車で宮崎市へ通勤してゐる關係上、部落の同年輩の人人の顔も名前も知らない。朝と晩だけの極めて縁の薄い生活をして居り、青年團に入つても何事もやれる譯ではないのだから黙つて引つ込んで居ればいいものを、元氣のいい友に青年團をやるから加勢してくれと頼まれた時、或るほゞ、この人を助けていくやうな人はこの村には居ないだらう、氣の毒だと承諾してつたのである。今から考へてみれば随分をかきな話である。その

私が部落の女子青年と共に何をやつたらいいのか見當がつかないのは、當然過ぎるほゞ當然なのだつた。顔も祿に知らない人人が何を望んでゐるのか、何を勉強し度いのか、どんな慰安が欲しいのか、皆目擱めない。焦るだけで既に疲れてしまふ氣持だつた。そんな時、友の住む隣り部落の分團がこの村で先がけて演藝會をやつたのである。それはもう十二月二十五、六日であつたらう。性來の私はこのやうな事には極めて冷淡なのであるが、青年團を引き受けてしまつた以上、さうか、と澄まして居られない。

當日、行つてみて驚いたのは、バラックのこの村唯一の劇場に觀客がワンサと詰めかけてゐることだつた。中には梁にまで腰かけてゐる者もある。物凄いな。聞いてみると出し物は六十位もあり、それに飛び入りもある豫定だから六時頃から始めると、十二時か一時頃迄かかるだらうと言ふ。其處で私が始めてお目にかかつたものが二つある。その一つはハナといふものの存在であり——金百圓也だの、一焼酎一本也だのである——もう一つは、股旅ものといふ踊だつた。何しろ始めて觀るのだから、一つ二つは珍らしくもあつたが、あまり重なりと、例の笠笠を片手に持ち、脚絆をつけ、振わけ荷を背負つて、變なくせのある脚さりでつとつと出てこられると、ああ又かとけんなりして胸が悪くなつてしまふ。大半がそんな種類の踊で占められ、寸劇もあつたが、大低俗惡なものだつたともかく最後まで觀ねばわるいと思つて居たのだが、遂に十一時頃觀るのを止し、冷たい夜氣

に浸つて歸りながら、頭は重苦しい滓で一杯だつた。

ところで私の分團も男子の班長と相談の結果演藝會をやつたのである。何しろ自分がこゝろで大流行を極めてゐるヤクザモノといふ踊を知らないところから、遊戯だとかアコードオンとか、さういふ女學校の學藝會が少し年をとつた品のない位のものになつてしまつたが、その頃は正月でもあり、農家も暇なので皆集つて練習した爲、お互ひの氣心もよく知れ、青年團が新らしく發足するのには都合がよかつた。その點私はとても喜んでこれからだ、と意氣込んでゐた。前にも書いたやうに『農村文化について』などと名づけて新聞記事になり、社會的な問題として全面的にとり上げられて居り、又、國民學校の生徒が踊を真似たり、流行歌を唄つたり、とに角青年團の演藝會たるもの、寔に重大な影響を與へたものである。

『以て嘖す可しでせうね』

なにと、色んな不評判に心を痛めながら、幹部達と笑ひ合つてはゐたが、この不名譽をとり返すためにも一層頑張らねばならなかつたのだ。第一に手をつけてみたのが英會話講座である。専ら女子青年の方がやり度いと、大變な熱心さなので一週一回程度、夜開いてみたのだが、學童も教はり度いといふことで、出席率のいいのはその子供達であり、四回目ともなると殆んど子供達ばかり、寒い夜なご一人も來なかつたりして、とうとう選舉前迄で打切つてしまつた。まことに儂ない英語だつた。これは進駐軍にも

馴れて珍らしくなくなつてきたのと同時に、興味が削がれてしまつたのだらうと思つてゐる。

これに前後してこの部落だけで機關紙をつくつてみた。原稿は團員が書くことにして月一回。書くことがない、と言ふのを、思つてゐることを發表する習慣をつける爲だから、と説き伏せ漫畫でも散文でも手紙でも日記でも何でもいいことにしたが、稿を寄せる者は極く少數でしかなく、書きます、と言つてゐる書かない者の多いことに私は驚いてしまつた。又、團員の一人が『青年週報』なるものを作り、週のトピックを書いてゐたがこれは現在中絶してしまつてゐる。それから小さな圖書室を作らうと團員の家を借りて夫夫書物を集めておいてみた。極く一般的で、やさしく讀めるものを集めた積りだつたが、難かし過ぎて頭の痛くなるシロモノばかりださうで、利用者が殆んど無い。それにレコードコンサートを一々催してみたが、英雄とか、華麗なる圓舞曲などだつたために、人人は集つてゐたが、さつぱり解らず失敗に終つた。で第二回目は昔の質のいい流行歌を主にして、外におあそびなごやつたら、皆たのしんでくれた。その外遠足を行つたりしたが、何一つとして永續性のあるものはなく完全な失敗に終つてしまつた。だが、これにもこゝろに文化會でも名付けて一ト月二回位、洋裁を勉強したりお料理とか英語とか、その外楽しい遊びを加へて、何か雰囲気をつくらうと計畫してゐたのだつたが、團員達の青年團への關心は漸次薄くなり、幹部達も些細な事で青年學校と衝突してみ

執筆者紹介

田中克己 詩人・東京都
山崎しづ子 評論家・東京都
伊藤部敬子 評論家・東京都
長池 澄子 宮崎縣・清武村
藤森 成吉 作家・長野県・諏訪市
森山 啓 作家・石川縣・小松市
上泉 秀信 評論家・福島縣・渡邊村
伊藤永之介 作家・秋田縣・横手町
小田 嶽夫 作家・新潟縣・高田町
中村 地平 作家・宮崎市
植村 敏夫 農業研究家・東京都
田村 忠雄 醫師・宮崎市
東 洞 詩人・福岡市
岩瀬 進夫 歌人・宮崎市
小田 黒潮 俳人・宮崎市
下村 千秋 作家・東京都
渡邊 和郎 作家・愛知縣
谷村 博武 詩人・宮崎市

新年號豫告

小説隨筆特輯號

隨筆
電化の夢 日高安壯
三 年 目 杉田秀雄
ゲイテ 難 題 津田青楓
卑屈性のひろがり 小川親夫
青年團と文化指導者 市川文夫
ありし日の日記 砂山博嗣
思考の自由について 清水ゆき
法被とモンペ 同屋根の下に
詩 同屋根の下に 田中友次郎
讀物 俠客とその時代 谷村博武
評論 H.D. ロレンス私解手帳(終回) 堀口 大 桑木 殿眞・眞杉 静枝・神西 清
通信 堀口 大 桑木 殿眞・眞杉 静枝・神西 清
小田 嶽夫 伊知地休三・泉 地 平
無信仰のこころ 小田 嶽夫
時田さんの鶏 外村 繁
歸 心 小 泉 讓
傳 令 火野葦平

後記

新憲法は新しい知性の中にその動向を求めて、發布された。それより先、各派、各立場による改正草案が渦巻のやうな奔勢、激しい内に検討され、論議された。此の新憲法に對して國民は或る點、單なる議事改正を見るが如き、低い關心しか示さなかつた。又自分達に直接關係ある事項のみ、記憶に止めるに過ぎなかつた。勿論、之は必要な事ではあり、必然的な事でもあるが、然し乍ら今回の新憲法の理念、是に依る附帯的な政治要素等、もつて國民は深い直接求心すべき意欲を持たなければならなかつたし、又、是を研究しなければならなかつた。現在、發布よりわずか二ヶ月を経たに、はらず國民の新憲法に對する關心は冷却……と言ふより初めから事大的に見送つたと言ふ感が深い。此の事は直ちに地方文化振興と言ふ問題の推移に當てはる出来事である。むしろ憲法問題より地方文化と言ふ事等、もつて地方人には直接の繋りがある筈であるが、之が一般の人の眼から遠ざかつて行く事は、一部識者の甚だ憂ふる所である。此の事大思想は反面、いい加減な低劣な文化活動を醗酵しつつある。平等・自由・平等、此の美しい人間精神への回歸と言ふ寶玉は、殘念にも我々の力によつて闇に隠れたものではなかつた、だか此の奥へはれた美しい寶玉の中に、友、師、兄弟我々の父母の無量の血が流れてゐる事を閑御されはならぬ。……此の爲にも文化國家と言ふ言葉は今日鼻

持ちならぬ言葉であるにせよ、尙、文化國家建設を叫ばなくてはならぬ立場になるのであるか……この時、我々は愚かにも事大的な文化活動を嘆き、弄ぶ事に絶對に出来ない筈である。憲法問題にしろ、地方文化にしろ氣紛れの様に素通りは許されない。全らく、三省して永續的に、反事大的に事を割り、視るべきである。發行日が遅れる事は編輯者として最も苦痛を感じる事である。本號多少遅延した事を御詫びする。

文化廣場 第一卷第五號
臨時定價四圓五拾錢(稅共)
(送料三十錢)

直接御注文に就て
豫約の御注文は第何號より御明記の上、半々分概算金三十圓を以て御申込み下さい。定價不同の場合も金切の節は御知らせ申し上げます。
昭和二十一年十二月二十日印刷
昭和二十一年十二月二十五日發行
宮崎市橋通丁目九文化
編輯兼發行人 鈴木 徳太郎
印刷所 宮崎市高千穂通二ノ二 網雄
印刷所 宮崎市高千穂通二ノ二 網雄
配給元 東京都神田區淡路町二ノ九 日本出版配給株式會社
發行所 宮崎市橋通丁目九文化
振替鹿兒島二〇番
會員番號A四三二五

好評・發賣中

中村地平著
田中季夫裝
長篇
少女小説
百合先生

直接申込受付

B6判 表紙五度刷 定價十五圓
美裝挿繪數葉入 送料一六圓
(書留送)

少女期から處女期にける女性に、推賞しうる小説の少ないことは過渡期にある日本にまつてかなしみの一つである。物語りは花多き臺灣の女學生たちと一高學生を中心にくりひろげられ、純愛のいかにあるべきかを乙女諸君の胸にかくる好簡の作品である。かつて少女雑誌に連載好評を博したものである。

近刊！十二月下旬發賣豫定

坪田讓治著 塩月桃甫裝

訂改 兒童文學論 (豫定價)
定價十五圓

新しい日本が世界の注目をあびて立上る日、その役割は今日の兒童によつて果されるであらう。しかしそれは多難なばらにみちた道である。兒童文學の第一人者たる著者が、兒童の明日を思ふが故に、世の教師に、両親に、同胞におくる熱誠の文學論。

近刊書目

中村地平著
太陽の眼 B9判 二五〇頁
小山いと子著
Fのロマンス B6判 二五〇頁
森千枝著
森千枝詩集 A5判 八〇頁

文藝雜誌 小説特輯
龍舌蘭 二十五輯

小説
夏のはな 山中 卓郎
一年後 黒木 清次
岬の家 三島 一男
漁村小景 渡部 哲三
満洲懷古抄 原田喜一郎
村 柳川 抒情 富松 良夫
風のある風景 野田 早苗
夏の白抄 谷村 博武
鐘が鳴つてゐる 服部 七郎
幼い日 田中長二郎
水 魚 田村 健二
母なる刻 森 千枝
中野重治…… 中山 正道

農民の眞の解放と増産
こは「新農民讀本」によつて

農民には必ず各一冊を非農家もこの時代にそなへて各一冊を

青年師範 授松田義夫著
家畜飼育のコツ
宮崎農專 授市川親文著
肥料の手引
宮崎農專 授平田正一著
病害のはなし
日向日日新聞 報導部長中村秀人著
土地制度のはなし
宮崎農專 授三輪忠珍著
蔬菜栽培のはなし
以下續刊!!

B6判 豫定價各七、〇〇
各冊一〇〇頁 送料一、〇〇

宮崎市橋通丁目九文化
西圖書株式會社
振替鹿兒島二〇番
〇八一

洗ひ落ちのよさ！
伸びのよさ！
植物のよさ！
ここにあり

植物性厳守

フタヤマ・パロン化粧品

九州代理店

大野商店

宮崎市黒迫町二丁目九五

小間物
其他化粧品

日高

メッセンジャー

電話 1134

宮崎市上野町二丁目

誌雜句俳

花陽紫

目丁二通松高市崎宮 所行發

會句俳向日 方村上

文化殿堂

新銳 若草映画劇場

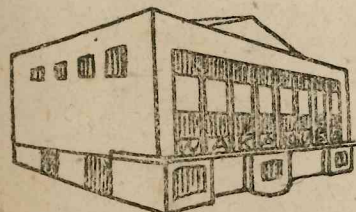
10月開館

完璧の發聲映寫裝置と

誇り颯爽南九州に君臨！

その名前が示す如く常に新と

常に伸びんとする



宮崎市廣島通三丁目

看板と塗装

★白★星★

天神町一丁目

出張部 山海食堂内

電

氣の齋す生活の福祉を

あなたの御家庭に御臺所にオフィスニ！

★各種電熱器具 アイロン コタツ

★電 蓄ラジオ

★各種照明器具 その他電氣器具一般

★各種電氣工事 ネオン工事請負

デンキの事なら

何でも揃ふ



林電氣商會

宮崎市橋通一丁目
電話 七二九番

子供の國

——寫眞部開設——

美しい背影で「印象の寫眞」
を御撮り致します

御誂京染
婦人服飾品

おぐらや

宮崎市橋通三丁目

文友堂

高級書籍
雑誌各種



鹿兒島市金生町八
得藤佐市

古本高價買入
賣つても
買つても
安心堂書店

宮崎市仲町

各種染料藥品

漁業具の福音
舶來を凌ぐ
漁網染用カッチ

旭染料工業所

都城市牟田町

ゴム印
ミトメ印
信用第一
實屬品

宮崎市黒迫町二丁目

はんや南章堂

御急ぎの品は
今直ぐ
出来ま

復興！

山本商會

建設！

古諸建築機械品
其建築材料修理販賣
他建築機械品

代表者山本庄一

宮崎市廣島通一丁目 電話三六九

婦人服店

洋服ト生地ノ御用



生地ト洋裁

附屬品一式

並ニ

各種ボタン

卸小賣

坂本ボタンド店

宮崎市橋通四丁目 坂本勤吾

兵器處理委員會

中國支部宮崎地區請負所

土木建築請負業

代表者山本清

宮崎市廣島通一丁目 電話三六九

近代の農學ニ基礎ヲ置イタ

最新シイ型

非常ニ便利デ

堅牢無比ナ

ミヤノ一式農具

人力脱穀機
水田中耕除草機
製繩機
其ノ他農機具



合名會社

宮崎農機製作所

宮崎市淀川町一ノ二六

電話一六〇番

堂かい申

昭和館通り

春日町二丁目

★飲食店

★飲食店

御料理

ま津

宮崎市橋通二丁目

電話一六二番



有明産業株式會社發賣品

純良醬油の素

粉末袋入
一升分

從來販賣された醬油の素は配給醬油がなければ出来ませんが、本品は配給醬油なしで出来る眞の醬油の素であります。使用法は詳しく書いてありますが誰れにも簡単にすぐ造る事が出来ます。（從來の惡評の箱入り醬油の素ではありません）

（弊店は卸専門でありますから各小賣店で御買求め下さい）

宮崎市末廣町一丁目

卸問屋 昌孝商會